

KSK

発行 KSK 神奈川県障害者定期刊行物協会
〒222-0035 神奈川県横浜市港北区鳥山町1752番地
障害者スポーツ文化センター横浜ラポール3F 横浜市車椅子の会内

あゆみ会報

編集 湘南あゆみ会
〒254-0807 平塚市代官町21-4 SEA平塚ビル3F フレンズ湘南内
TEL/FAX 0463-24-0420
定価 50円（会員は年会費に含まれています）

2020年8月号 第156号

漸く 梅雨明け !!

長かった梅雨が漸く明けました。

久しぶりの青空にほっとした方も多いのではないのでしょうか。

この長雨で多くの災害が発生し、亡くなられた方も大勢います。また、コロナ禍が鎮まらず、多くの不安の声がある中で、政府はGo Toキャンペーンを実施しました。その結果、感染者が全国で急増し、重症者も増え、医療機関の病床不足、医療従事者の疲弊が心配されます。

私達、精神疾患の人を抱える家族は、不安定になりやすい当事者、自分自身の高齢化、さらにその上に心配がまた一つ増えましたが、こんな時だからこそ、家族会のつながりが重要になっています。コロナウイルスに感染しないよう気をつけ乍ら、励まし合って、希望を持って、根気よく家族会活動を続けて行きましょう。



報告

7月定例会 DVD鑑賞と家族交流会

7月14日（火）ひらつか市民活動センターに於いて、DVD「精神障がい当事者と家族の相互理解学習プログラム -なぜ親にあたるの?-」を観た後、交流の時を持ちました。参加者15名

このDVDは暴力をしてしまった当事者のお話、それに耐えてきた家族のお話が入っており、大変参考になりましたので要約して報告します。

親に当たる 家族への暴力とは

I 家族への暴力に関する研究

日本の精神科医療の特徴

- 1 訪問サービス、家族支援の不足
- 2 家族に依存した施策
- 3 偏見の強さ 家族の孤立

暴力は当事者の病状悪化時におきやすい。

暴力を受けた親は精神的に疲弊し、理性的な判断が困難になる。暴力の理由が分からず解決に時間がかかり、家庭崩壊にもつながる。

II 疾患と治療

陽性症状 陰性症状 認知機能障害などが起き、一生付き合う慢性疾患である。

III 病状悪化時の当事者の話

自己判断で断薬 妄想・妄言など陽性症状が激しく、親に紐で縛られて医療保護入院。母が宇宙人に見え、身の危険を感じて殴ろうとした。認知の歪み、混乱等から暴発するなど本人なりの理由がある。親を責めた時、肯定も否定もせず、「ああそう」と聞き、共感してほしい。父親に苦しさを訴えた時、「お前の苦しきは半分分るよ」の言葉が嬉しく、医療に繋がった。

恨まれた時の対応は、あなたが苦しむのを見ているのが辛かったから、良くなって欲しかったからなど、親も悩んでいることを分かってもらおう。

暴力が起きたら親は先ず逃げる事。暴力は親だけでなく、親を傷つけてしまったことで、当事者もPTSDとなる。落ち着くまで視界から消える事。そして後で、心配していることを電話などで伝える。あまり激しい時は警察に連絡する。拉致状態で強制入院させることは、心の傷となり、医療不信、親不信が増大する。

IV 平常時に暴れるのはなぜ？

進学を諦めなければならぬ自分への不甲斐なさ、怒りからくるエネルギーの衝動を抑えきれなくて親に向かった。嫌な事が自分の中で整理できずに爆発。病人扱いされ、おいて行かれる淋しさ、

自分でも分らないもやもやが溜まり爆発。

親子の認識のずれが発病で拡大。

親：医者にかかり、薬ものんでいるのに何故？

子：病気を認めたくない。症状と副作用の辛さ。

親に分かってもらえない怒り。ひきこもりから溜まるうっぶん。高圧的、支配的親への反発。受け入れがたい状況を親のせいにして何とか生きている。親も精神的に不安定になり、生きる気力を失くし、普通に会話のできない家庭となり、更に認識のずれが拡大する。

矛先が親なのは何故か？ 親は頼れる存在、親には許されるなど、親への甘えがある。

爆発のきっかけは、コミュニケーションの障害もあり、些細な事が多い。コントロールが効かなくなる。親には、壊したものを片付けるのではなく、「大丈夫か」の一言がほしい。世間一般の価値観を捨て受容してほしい。

関係悪化の原因は、社会に当事者の居場所がない。同居が多く、親の保護下にいることになり、関係性が悪化しやすい。親子の密着が社会からの孤立を深め、悪循環となる。家は安全だが密室となる危険性がある。

V 解決策とリカバリー

家庭に風を入れる。外に繋がることで当事者は視野が広がり、希望を見つけられるようになる。不完全な親を受容できるようになり、感謝が生まれる。他の人を見ることで自分を見るきっかけになる。親は家族会に繋がることで内なる偏見から解放され元気になる。親のリカバリーは子のリカバリーに先立つ。親子の認識のずれを解消するためには、開かれた親子関係を作る。聞きたいことを言える関係が必要。溜め込まないこと。子の事に関心を持ち、同じ目線で話す。

対処法：当事者①行き場のないエネルギーの発散できる場を作る。親とは適度な距離を保ち、気持ちを吐き出せる友を持つ。②親から無理やり外に出されたことにより、別に暮らすことで責任感が出て成長できた。

子のリカバリー

医療：主治医 薬 疾患の理解

楽しみ：友達 趣味 恋愛

生活：一人暮らし 結婚 子育て

社会参加：デイケア 作業所 仕事 自分なりに病気を納得した時

親のリカバリー

楽しみ：友達 趣味 恋愛

仲間：家族会 沢山話す 抱え込まない

VI 親と子のメッセージ

子から親へ

親を支える存在になる。自分や病気を認めてくれてありがとう。辛抱強く待っていて感謝。これからは親孝行したい。自分の人生を楽しんでほしい。親が幸せそうだと嬉しい。

親から親へ

家族だけで解決しようとせず、外部に助けを求めること。当事者にはいろんな方向からメッセージを送り続けること。必ず届く時がくる。精神病の世界は大変だけど豊かで優しい。希望を持って頑張る。

子から子へ

あなたを助ける支援がある。自分だけ辛いのではない。人と繋がろう。マイペースで歩もう。自分で自分を受け入れることが大切。何一つ遠回りはない。

《精神疾患を持つ人のリカバリーとは》

たとえ疾患による限界があっても、満足のいく、希望のある、そして貢献する人生の生き方であり、精神疾患という衝撃的な影響を乗り越えて、新しい人生の意味や目的を見出すプロセス。

〈感想〉

精神疾患を持つ子の暴力で悩んでいる家族は少なくありません。今回、このDVDを見て、暴力をしてしまう精神疾患の人の心の内が良く分かりました。どの人も親から離れ、自立することで成長したと言っており、親の幸せを願っています。親のリカバリーが先ず必要です。 (Y.Y 記)



じんかれん研修会 講演

テーマ「改革が避けられない日本の精神医療 ～みんなでチャンスを活かそう～」

8月4日（火）氏家憲章氏を講師に迎え、今年度第1回目の研修会がかながわ県民センターにおいて行われました。

参加者 25名（定員半数）

講師の氏家氏には、4年前にもじんかれん研修会でお話ししていただきましたが、この日も明快な語り口で、日本の精神医療の現況と改革がなかなか進まない理由、その中でどう運動を進めていったらよいかなど、熱のこもったお話を下さり、講演後は参加者の質問に熱心に答えて下さいました。概略を報告します。

日本の精神医療の改革とは

日本には、未だに精神疾患を危険視し、社会防衛的視点に立つ考え方がある。これを解消し、世界標準（世界の今日の到達点）の地域ケア中心の精神医療に転換する。また、一般医療に比べ、差別扱いといえる「安かろう・悪かろう」の精神医療を解消する。また個人の尊厳・基本的人権を守り、安心・安全の精神医療を提供する。

精神医療・精神病院の歴史

海外では1880年頃から1960年頃に精神病院入院の台頭期があったが、1960年～1980年、抗精神病薬の発見と本格使用により、また医療費の増大による財政危機・人権問題などから精神病院は衰退期に入った。一方、日本ではこの頃、病床数が3倍に増える台頭期となり、今日まで入院中心の医療を続けてきた。1980年以降は海外では地域ケア中心の医療が定着し精神病院は終焉期に入った。しかし、日本では最近になって、精神病院の衰退期と終焉期が同時進行している。

世界標準の精神医療はどうなっているか

精神の病気や障害があっても、医療支援と生活支援によって地域で社会生活ができるようになった。病気を治すことを第一義にするのではなく、当事者の思い、目標の実現など人生を支援する事を優先する。例えば結婚、妊娠、出産も支援を受

けながら可能であり自動車運転も可能である。

お金の使い方が正反対

海外： 地域ケア 60～90% 入院医療 40～10%

日本： 地域ケア 2.6% 入院 97.4%

なぜ、日本だけが入院中心の医療政策を続けているのか。欧米諸国は公立病院が中心、日本は9割が民間病院で経営問題がある。

要因1、精神医療政策の基本が社会防衛的

2、安上がりの医療のため、財政悪化がない

3、1960年代に改革のチャンスを逃がした

4、法改正が部分改正に留まってしまった

5、病気を治すことを第一義にしている

日本では精神医療の基本政策が戦後70年間、変わっていない。が、病床利用率の低下及び外来患者の増加により、改革が避けられない状態になっている。病床利用率の低下を認知症患者を入れることで補っている。（日本だけ）

広がる精神医療改革の展望

1. 深刻化する心の健康の危機

2. 長期入院の医療体制の崩壊

3. 放置できない医療の実態

高齢者の長期入院、隔離・身体拘束などの人権問題、親亡き後の問題

4. 2010年「こころの健康政策構想会議」の運動

5. 2014年「病棟転換型居住系施設」反対緊急集会とその影響

6. マスコミの報道

7. 公立精神病院協会の設立

精神科病院を考える会の設置

今こそ病院崩壊の危機をチャンスに！

情勢を広く知らせる世論を作る！

みんなで取り組む。賛同者はいっぱいいる！

講演後、会場から、・地域包括支援システムを早く実行に、・「こころの健康構想会議」のような運動を起こす、・政治家に訴える、など活発な意見が出されました。



これからの予定

●9月定例会 SST勉強会

9月7日（月）13：30～16：30

崇善公民館第1・第2会議室

久しぶりのSST勉強会です。

皆さま ご参加下さい。

定員 28名

マスク着用をお願いします。

微熱のある方、咳の出る方など、体調不良の方は
ご遠慮ください。

●10月定例会 秋のバス旅行

日時：10月15日（木）

集合時刻と場所：8時 平塚駅南口 JAビル前

行先：山中湖方面

水陸両用バス「カババス」乗車、リサとガ
スパールタウンと忍野八海散策

昼食：ほうとう定食

募集人数：30名

参加費：当事者 3000円

家族 4000円

（昼食代・保険こみ）

平塚帰着：17時30分頃

申込締切：10月1日（木）

申込先：080-5005-0779 曾我迄

日帰り旅行となりますがご了承ください。



最近のニュースから

「おかねのけいさんできません」 男性自殺 障害の記載「自治会が強要」

毎日新聞 2020年 7月31日

知的・精神障害がある男性（当時36歳）が自治会の役員らに障害者であることを記した書面を書くよう強要され、自殺したとして、男性の両親が自治会と役員らに計2500万円の賠償を求める訴えを大阪地裁に起こした。両親によると、男性は「おかねのけいさんはできません」などと障害の影響についても詳しく書かされ、他の住民にも見せると告げられた翌日に自殺していた。7月31日に第1回口頭弁論があり、役員らは争う姿勢を示した。

遺族が提訴、自治会役員らは争う姿勢

訴状などによると、男性が1人暮らししていた大阪市内の市営住宅では2019年11月、自治会の班長を住民同士がくじ引きで選ぶことになった。男性は障害を理由に選考から外してもらおう役員らに求めたが、「特別扱いできない」と聞き入れられなかった。

役員らは集会所で男性と対応を話し合った際、障害があることや日常生活への影響を記すよう強要。男性が書面を作成すると、役員らは他の住民にも書面を見せて男性のことを紹介すると説明したという。翌日の11月25日、男性は自宅で命を絶った。

両親「障害有無は個人情報」

両親は「障害の有無などは他人に知られたくない個人情報。必要性がないのに本人の意思に反して書面作成を強要した」として、プライバシーや人格権の侵害を主張。他の住民に見せると伝えて心理的な負担をかけており、役員らは自殺を予見できたと訴えている。

近くに住む兄（41）によると、亡くなる前夜、男性は「言いたくないことまで根掘り葉掘り書かされた。さらしものにされる」とため息交じりに話し、落ち込んでいたという。兄は「弟は真面目でおとなしく、障害もあって他人に指示されると抵抗できなかった。自殺に追い込んだのは許せない」と話す。

（この記事に対する感想お寄せ下さい！）

●8月のサロンあゆみ

8月21日（金）午後1時～3時30分

ひらつか市民活動センターA会議室

ご都合の良い時間にお越しください。

定員16名 マスク着用

<原稿募集>

あゆみ会報の原稿をいつでも募集しています。

コロナ禍での過ごし方の工夫、日常生活の中で思う事
読書感想、楽しかった体験、お薦め料理などなど、
何でも結構です。お待ちしております。

郵送先 〒254-0807 平塚市代官町21-4 SEAビル
3階フレンズ湘南内 湘南あゆみ会